

長期化するデフレ、先行きに対する不透明感と不安感、政・官・民に付き纏う癒着構造が齎す社会の不信感などから、昨今の日本並びに日本人はすっかり自信を喪失、奇跡の経済復興を成し遂げた勢いは見当たらない。そんな中、昨秋の日本人によるノーベル賞のダブル受賞は人々に一条の勇気と希望を与えた、誠に喜ばしい出来事であった。中でも田中耕一さんのケースは多くの日本人にいろいろなことを改めて考えさせる大変よい機会を与えてくれたように思う。其の一つが基礎研究と技術力に付いての一般的理解と現状のパーセプション・ギャップについてであろう。田中さんの業績は「たんぱく質の分析」に関するものだが、其の分析装置の開発・商品化は実は田中さんの努める島津製作所や日本のメーカーではなかった。ドイツや米国で先に実用化されたということを知られ、多くの日本人はショックと共に何故と思わず絶句したのではなかろうか。田中さんは英国の子会社で更なる改良と商品化を続けておられたと聞く。

私のように物づくりの理論や実践の持ち合わせがない人間にとり、大変不思議であったことは、日本は基礎研究の分野で欧米の先進国に遅れをとるが、製造技術、改良、品質管理等に於いては常に自他共に認める世界に冠たる先進工業国だと言う認識であった。その為、欧米の基礎研究成果や技術、ライセンスを高額で買い取り、一段と高品質で廉価な製品にまで改良し世界市場に供給することで経済成長を成し遂げてきた。ところが今回は逆になくなってしまった。日本人が研究・開発した方式・技術が国内で十分な評価を得られないまま、何時しか「目利き」の多い欧米でいち早く評価・実用化され、我が国へも輸出されているのである。一方基礎研究の重要性が官民で叫ばれ、これからは基礎研究を大いに振興することで物づくり日本のサバイバルが初めて可能になると言われている。そして一部で我が国の基礎研究は決して欧米先進国に劣るものではないとした楽観的な見方が支持されている。2001年に於ける米国での特許出願件数で日本企業はトップ10の内7社を占め、突出した一位であることもこうした見方を支持するものであろう。又よく引き合いに出される国際競争力比較で日本は十数位に甘んじているが、製造業を選べば2乃至3位にランクされ決して劣ってはいないとの主張も出る。

研究開発には莫大な投資と人材が求められ、其の成果が出るまでに長い時間と大きなリスクが伴うことは明白だ。その為、企業はリスク分散と効率性の視点からも、合併や統合を行い又共同研究に余念がない。この面では欧米企業が遥かに進んでいると言える。大学や公的研究機関による研究開発の位置づけと評価、官民との共同研究もまた大切だ。こうした面を含めた総合的なビジョン、戦略が打ち出されるが、いざ実行となると絵に描いた餅の観がする。我が国は、技術力の集積を十分評価・活用、さらにそれらをグレードアップ、其の上で、研究開発には独自の取り組みを行う必要がある。さもないと、基礎研究と技術力の両分野で先進国と後進国の後塵を拝することになる恐れが多分にある。更に企業としては研究開発と実用化に当たり、タイムリーで適正な評価の出来る長が欠かせない。